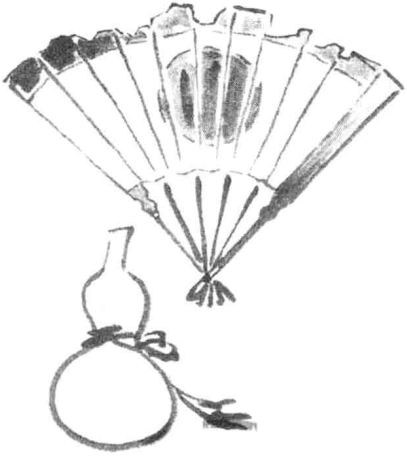
酒と女と槍と

海音寺潮五郎



新潮社版

酒と女と槍と

昭和三十三年四月三十日　発行
昭和三十三年六月二十日　二刷

著者　海音寺潮五郎
発行者　佐藤亮一
印刷者　佐藤精亮
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京三四局代表（七一一（九）六一〇一（五））
振替東京八〇八番
定価弐百五拾円
地方売価弐百六拾円

印刷　二光印刷株式会社　製本　新宿加藤製本所
© 1958 by C. KAIONJI TOKYO Printed in Japan

目次

酒と女と槍と……五
兵児一代記……三七
豪傑組……八七
矢野主膳……一三九
立花宗茂……一七七
日もすがら大名……二三九

装幀　野口昂明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

酒と女と槍と

酒と女と槍と

一

関白豊臣秀次が秀吉の怒りに触れて高野山に追い上げられたのが文禄四年の七月八日、切腹を命ぜられたのが七月十五日、首は三条河原にさらされた。半月後の八月二日には秀次の妻妾等三十八人が三条河原で斬られ、野犬の死体でも取りすてるように、同じ穴に投げこみにして埋められた。

世間は秀吉の秀次に対する憎悪の深刻激烈におどろいた。

「日本に関白という職が出来て以来、関白であった人が非業の死をとげた先例はないぞや。戦国殺伐の気風ののこっている世とはいえ、あまりなること。ましてや、女君方にまでこれほどのことをなさるとは！　世も末ぞや」

と、ささやく者があり、

「秀次公を可愛ゆいと思し召したればこそ、後目にすえ関白職もおゆずりなされたのであろうに、四年の後にはこうまでお憎しみが募ろうとは！　人の心ははかられぬものとは言いながら、太閤様の御精神が尋常でなくなったのではないかのう。お年を召して、耄碌して気が狂れなさったのではないかや」

という者もあった。

その頃、京の内外の辻々にこんな建札が立った。

われらこと、故関白殿下諫争の臣として数年まかりあり候ところ、この度不慮の儀これあり候こと、われら職分おこたりのためと申訳なく存じ候。さるによって、来る○○日正午の刻を期して、京千本松原において、亡君へおわびのため切腹つかまつるべく候。諸人の見物くるしからず候こと。

月　日　　富田蔵人高定

高札の主富田蔵人高定は、伊勢安濃津（今の津）五万石の領主富田左近将監盛高の次男で、当時名だたる勇士で、とりわけ槍をよく使い、「槍の蔵人」と異名されているほどの人物であった。

彼は少年の頃から秀吉の側近につかえ、度々の戦功を積んで一万石の身分となったが、剛直な性質でもあったので、秀吉が関白を秀次に譲りわたした時、えらばれて諫争の臣として秀次につけられた。当時彼は年わずかに二十六であったので、人々はその若さでそれほどまでに秀吉に買われている彼の名誉を羨んだ。

高定は名うてのだて者だ。この追腹は太閤への面当に相違ない、さればこそこんな大袈裟なことをして、見物人を集めて興行するのだと、皆考えた。忽ち大評判になった。京の内外や伏見は言うまでもなく、一両日の後には大阪や堺のあたりまで知れわたった。

高定の聚楽の屋敷には、親類縁者、朋友等が殺到した。追腹をとめるためではない。主人のために追腹を切るのは、最も美しいこととされている時代だ。感激の意を表わし、あわせて名ごりをおしむためであった。

しかし、高定は不在であった。高札を立てるように命じておいて他出したという。
「当日の朝までには帰って来ると申されましてございます。はい。行く先はうかがいましたが、申してくれません。はい。さがすこと無用との申しおきでございます。はい……」
留守居の家老が汗をかいて説明する。
人々はあきらめて帰って行ったが、高定の父の盛高と兄の知信はそうは行かない。手をつくして心あたりをさがした。しかし、杳として不明であった。

二

高定は、かねて懇意の下京の大町人の所有である東山の別荘にいたのだ。
屋敷を出ると、彼は真直ぐにここに来た。
「四五日当家の座敷を貸してくれい。女共を呼んで、酒をのんで楽しみたい」
といって貸してもらうと、連れて来た下人に一封の手紙を渡した。
「これを祇園の境内で興行している村山左近に届けてまいれ」
村山左近は当時名の高かった女歌舞伎の太夫である。高定はその一座の采女という女が好きで、以前からよく見物にも通ったし、座敷にも呼んでひいきにしているのであるが、今この世を辞するにあたって、名ごりの遊びをしようと思ったのであった。
二人の関係は、単に好きでひいきというだけで、それ以上のものはない。それは采女が物堅い女であったからだ。当時の歌舞伎女はその本質は遊女同然のものであったが、采女はおそろしく堅い女で、客から招かれると、必ず、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お酒の御相手や、御座興のための歌や舞いはいたしますが、お枕の塵をはらうことはごめん下さいまして。それでおよろしければ上ります」

とことわって、客が了解しないかぎりは応じないのだ。

高定は男性的であることを信条としている男だ。名ごりを惜しむために呼ぶといっても、この機会を利用して言うことをきかせようなどという量見はさらにない。酌をしてもらって、たんのうするまで飲みたいというだけのことであった。

使いを出したあと、ひとりで酒をはじめていると、左近と采女が来た。

左近は二十七になるが、采女は二十にまだ一つ間がある。両人ともに花のように美しい。敷居ぎわに両手をつかえると、忽ち座中が明るくなったようであった。

「やあ、来た来た。ずいぶん逢わなんだな。あいさつなどはどうでもよい。早くここに来い、早くここに来い」

高定はもうかなりに酔って、上機嫌になっていた。にぎやかに呼びよせて、矢つぎ早やに盃をさした。

一時間ほどさわぐと、高定は左近に言った。

「四五日、采女を貸してくれんか」

左近はホホと笑った。

「舞台がございますよ。采女は一座の人気ものでございます。そんなに長い間舞台を休ませましたら、お客様方が承知なさいますまい」

「病気ということにしておけばいいでないか。ぜひ貸してほしい。頼む」

高定は坐りなおし、膝に手をおき、頭を下げた。いつもとまるで様子がちがう。左近はおどろきながらも、なおはぐらかそうとした。

「おやまあ、大へん。御冗談はよして下さいましな。あとでお笑いなさろうというのでございましょう。だまされませんよ」

「冗談なことがあるものか。おれが一生の頼みだ。ぜひウンと言ってくれい」

益々真剣だ。左近は美しい眉をかすかにひそめて、采女の方を見た。采女は微笑していたが、目に見えて青ざめていた。

左近は緊張せざるを得ない。キッと高定を見て言った。

「采女がどんな女か、殿様はよくごぞんじのはずでございます。殿様ほどのお方がそんなことをおっしゃってはいけません。それは女を苦しめるというものでございます。お願いでございます。どうぞそんなことはおっしゃらないで下さいましな」

左近のことばには、にがにがしげなひびきがあった。言ってしまうと、ていねいにおじぎした。采女も頭を下げ、低く言った。

「お願いでございます」

高定は手を振った。からからと笑った。

「間違ってはならん。おれは酒の酌をしてもらうことのほかは考えておらん。思う子細があって、この数日の酒は最もうまく飲みたい。それ故に采女の酌で飲みたいというのだ。このほかのことはさらに念頭にない。つき合ってくれい。もう一度頭を下げる。この通り」

と、また頭を下げた。

高定が嘘を言わない人間であることは、左近はよく知っている。
しかし、独断で答えられることではない。采女の方を見た。采女はうつ向いて、小さい美しい両手を膝の上でもてあそんでいた。思案にあぐねている様子があわれをさそった。
「本人が何と申しますか。殿様御自身で、じかにお聞き下さいまし」
「そうか。それでは、そなたには異議はないのだな」
「異議がありましても、本人同士があいたいずくなら、いたし方はないではございませんか」
左近は冗談めかして突っぱねた。
高定は笑いもしない。ひたと采女を見て言った。
「どうだ、采女、左近はああいう。きいてくれまいか」
采女は顔を上げて、高定を見た。
「お誓い下さいますか」
声もふるえていたが、白い百合を見るような細おもての顔に浮かんでいる微笑もふるえているようであった。
「誓うとも！」
「そんなら、お相手をさせていただきましょう」
座をこめていた緊張がこれでとけたが、誰ひとりとして笑うものはなかった。三人ともに長い息をついただけであった。

三

間もなく左近はかえって行った。
高定は采女を相手に酒をつづけたが、心のどこかにこだわりがあって、気持よく酔えないように感じた。高定だけではない。采女の様子もいつものようでない。
采女は職業がらに似ず、しとやかではあるが、陰気なところはない女だ。酒席のとりなしなども、さわがしくないほどににぎやかで、「よほどにかしこくなければこうは行かぬ」と、いつも高定が感心しているくらいなのだが、今日はなにかぼんやりしている。ともすれば考えごとでもしているような顔になる。
「こいつもこだわっている」
面白くなかった。帰してしまって、柳の馬場(ばんば)にでも行こうかと思ったが、ああまで骨折ってやっと引きとめることが出来たのだ、明日まで待ってみよう、いつもの采女にかえるであろうと、思いかえした。
宵すぐる頃、酒をしまって、寝室に入った。
約束だから、采女もならべてある床に入った。季節のこととて、蚊帳が吊ってある。二つの寝床は接近していた。
高定は寝つきのよい男だ。一気に眠りに入った。
どれくらい眠っていたのであろう、ふと目がさめた。
蚊帳から少し離れたところに行灯(あんどん)があった。灯を細めてあるので、おぼろな灯影はあるかなきかにしか蚊帳の中にはとどかない。
高定は隣りの床を見た。よく見えなかった。寝息さえ聞こえずひっそりとしている。

（かえったのではないか）

と、半身をおこすと、見えた。

向うを向いて寝ている。目をさましているらしい。肩のあたりの線が硬かった。警戒している形であった。

（やれやれ、女というものはなかなか男を信用せんものじゃな）

苦笑して、枕許の水さしから口づけに水をのんで、また眠りに入った。

夜が明けて、朝食は摂ったが、午少し前頃からまた酒をはじめた。

采女の様子は大分常態に復している。これこれ、これでなければ面白くないと、うれしかった。さっそくにからかう。

「そなたはゆうべ一晩中眠らなんだの」

「あら、そんなことはございません。なんにも覚えていないくらいよく寝みました」

「うそを申せ。おれが手を出しはせんかと思うて、一晩中肩をこらし、すくみ上っていたろうが。おれはよく知っているぞ」

「うそ、うそ。よく寝みました。ほんと！」

赤い顔になって、ムキな様子だ。

「おれがうそを言うものか。おれがうそつきでない証拠は、ちゃんと約束を守って、手出しをしなかったではないか。そなたこそ大うそをつく。白状せい！　一晩中用心していたに相違あるまいが」

「なんとでもおっしゃいまし」

「ああして用心してワクワクと胸をさわがせているのは、手出しをしてくれればよいと待ち望んでいるからだとは思わんか」
「いやらしい！」
しんからいやそうな顔だ。おこっている。
「ハハ、ハハ、ハハ、もしそうであったら、おれも考え直さねばならん。どうだな、ものは相談だが、左近を呼んで、約束を改めることにしようでないか」
「そんな冗談ばかりおっしゃいますと、わたくし、帰らせていただきますよ」
「ハハ、ハハ、ハハ……」
まことに酒がうまい。この調子、この調子と、うれしがって飲んでいるところに、左近が来た。
「やあ、約束の通りに行っているかどうかと、見に来たな。そちの見る所ではどう見える？何せ、水の出ばなの若い同士だからな。どうにかならなんだら、不具だとは思わんか」
この軽い調子に、左近は乗って来ない。青白くひきしまった顔で、
「殿様！」
というや、涙をこぼした。
高定は狼狽した。
「なんだ、なんだ。今申したのは冗談だぞ。そなたのようでもない。おれは決して約束を破ってはいないぞ」
左近は涙をおさえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com